

健康教育演習で学生が実感した学び —高齢者を対象とした演習を通して—

029

○伊藤亜希子^{いとうあきこ} 榊原千佐子 小堀ゆかり 北海道文教大学人間科学部看護学科

【背景】看護大学の多くが保健師看護師統合カリキュラムである。また文部科学省より「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」の報告があり、保健師基礎教育の充実及び実践能力の高い保健師を育てることが求められている。健康教育論は域看護活動において特徴的な活動であり重要な位置付けである。

【健康教育論の概要】4年課程の保健師看護師統合カリキュラムで、健康教育論は2年次後期に1単位30時間である。学内演習では、9名を1グループとしてテーマを与え、企画書を作成し教育者と対象者役、講評者となり学びの共有化を図っている。全ての発表終了後に学びを記載することを課題としている。

【目的】地域看護活動の特徴の1つである健康教育論での学生の学習内容を分析し、健康教育に関する知識と実践能力を養うための授業方法についての基礎資料とする。

【方法】1対象:保健師看護師統合カリキュラムで健康教育論を履修し、高齢者の事例を実践した学生44名のうち同意を得られた44名を分析対象とした。2調査期間:2010年11月から2011年2月。3分析方法:演習終了後に提出したレポートの学びの欄に記載された文章を内容の文脈を読み取り記述データを抽出し1つの意味ごとにコード化した。これらのコードの同質性と異質性を検討しサブカテゴリー、カテゴリーとして抽出し構成要素へと概念化した。なお分析の信頼性を高めるため、3名の研究者で検討を重ね同意の得たものを採用した。4倫理的配慮:レポート提出後に、研究の趣旨と研究同意の自由意思と研究参加の有無によっ

て成績評価に影響しないこと、また得られたデータは個人が特定されないことやプライバシーの保護を保証することを書面と口頭で説明し同意書の提出を得た。

【結果】44名の学生から抽出されたコード数は169で42のサブカテゴリーと[知識の取得]、[対象把握]、[企画]、[事前準備]、[実施]、[媒体]、[チームワーク]、[評価]、[実施による発見]の9のカテゴリーに分類された。特に[対象把握]と[企画]、[実施]についての学びが多かった。

【考察】学生の記録からは、対象者を把握し教育内容を考えて実施するという健康教育の演習目標に沿った学びの内容が抽出された。しかし評価に関するサブカテゴリーは波及効果のみであった。これは、学生が初めて健康教育を実施したことの達成感や企画書の作成から実施までに主眼をおいていたことが考えられる。

今後、地域住民を対象とした健康教育を実施する地域看護学実習の際には、評価の内容と必要性について学生に指導していくことが必要である。また、演習後に評価について個人とグループ内で考えて共有していくなど講義内容を工夫しさらに充実させていく必要がある。

【結論】健康教育演習での学びについて、学生の記録を分析した結果、演習目標に沿った学びの内容が抽出された。しかし、評価については学びとして意識した学生は少なかった。

今後は、学生が企画段階から評価の必要性を認識しながら評価計画を立案し、健康教育後に評価し内容にフィードバックしていけるように指導を充実させていく必要性が明らかになった。

連絡先 伊藤亜希子 akiko-i@do-bunkyo-dai.ac.jp